

派遣先所属 福島県商工労働部雇用労政課

氏 名 杵澤 俊夫 (くつざわ としお)

和田 基靖 (わだ もとやす)

派遣期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日 平成26年4月1日～平成28年3月31日

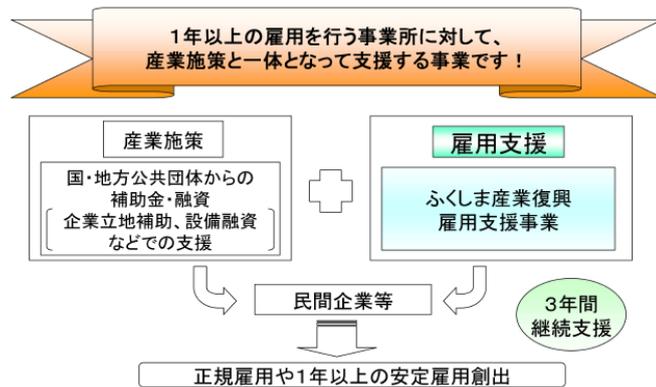
1 派遣業務の内容、現況

派遣先である雇用労政課は労政担当、雇用担当、助成金班で構成されており、平成27年10月31日現在で臨時職員も含めて24名が在籍しています。

このうち5名が自治法派遣職員で、派遣元は、奈良県、山梨県、東京都が各1名、埼玉県が2名となっており、いずれも厚生労働省の緊急雇用創出事業における被災者の雇用対策業務に携わっています。幅広い課の事務の中で復興関連の業務量が多くを占める状況が続いています。

我々が属する助成金班は、緊急雇用創出事業の一つである事業復興型雇用創出事業に関する業務に7人のチーム（福島県職員3、派遣職員3、臨時職員1）で取り組んでいます。

事業復興型雇用創出事業は、被災地域で安定的な雇用を創出し、地域の中核となる産業や経済の活性化事業に資することを目的に、産業政策と一体となって雇用面から支援を行うため、被災求職者の雇入れ費用と、人手不足に対応し県外からの雇用者の移転費用を支給するものです。

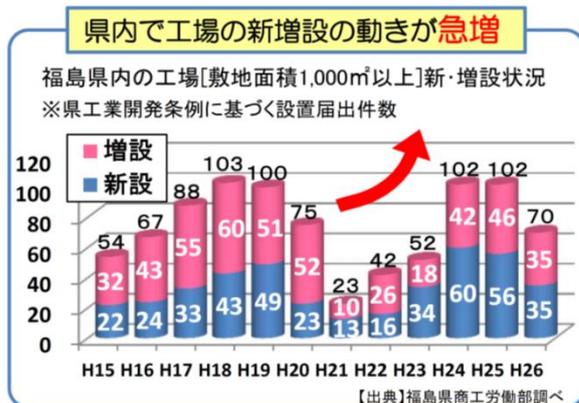


雇入れ費用は平成23年度から、移転費用は27年度からの制度で、



岩手、宮城の両県でも実施していますが、両県は今年度からは沿岸部に限っています。福島県では引き続き「ふくしま産業復興雇用支援助成金」として県内全域を対象に実施しています。

県が指定した補助金又は融資の採択を受けて被災求職者を雇い入れた事業所に、労働者1人当たり最大225万円を3年間に分けて支給するもので、商工労働部内で行っている中小企業等グループ施設等復旧整備補助事業、ふくしま産業復興企業立地補助金、ふくしま産業育成資金などをはじめ、庁内の各課事業と連携して事務を進めています。



グループ施設等復旧整備補助事業、ふくしま産業復興企業立地補助金、ふくしま産業育成資金などをはじめ、庁内の各課事業と連携して事務を進めています。

平成23年度から26年度までの4年間で延べ約5,400事業所、約26,000人、約500億円の支給決定を行っており、一部業務の民間委託をしています。今年度も

延べ約9,000件の支出が予定されており、委託先と調整し効率化を図りつつ膨大な審査・支払事務をこなしております。

具体的には、事業主から提出された実績報告について、支給要件を満たしているかどうかについて、労務担当者や社会保険労務士の方々と電話や書類のやりとりをして審査を進め、支給に至ります。

平成27年度に新たに支給決定する分については、7月から募集を開始、来年1月まで受付予定ですが、制度が大幅に変更となったことから市町村、商工団体、金融機関への周知に加え、県内各地でこれまでに例年より多い約20回の説明会を実施しましたが、10月末までの申請事業数は220件です。このためハローワークや経済団体等を通じての事業PRチラシの配布やテレビのスポットCM、ラジオ、SNSなどによる広報も展開しているところです。

また、平成28年度は国の概算要求では、新規事業に組み替え内容が変更になる方向であることから、27年度の制度において該当する事業主に支援が行き届くよう周知に努めています。申請された書類については、産業政策と雇用に関連性があるかどうか、対象事業を実施している事業所において雇い入れた被災求職者であるか、労働法令を遵守しているかなどの審査を行い、順次支給決定していく予定です。

関係者の皆様の関心も高いことから、年間を通じて制度全般に関する問い合わせも多く、事業の必要性を認識させられる日々です。現場に出向く機会は多くないですが、写真のように必要に応じて事業成果確認等のため、事業所への現地訪問も実施しています。

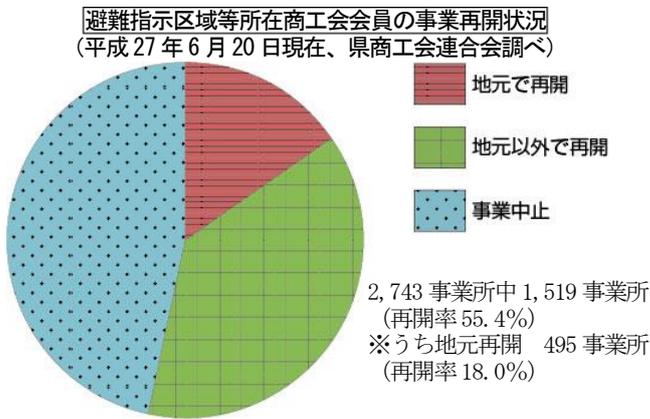


雇用創出効果のある設備を導入した事業所等の訪問の様子

訪問した企業の中には、原発事故で避難を余儀なくされ移転して事業再開をしている事業所もありました。震災後早い時期に自力で警戒区域から機械を搬出し、避難している従業員などを集め、操業再開を果たしている経営者の方のご苦労話に「福島県の底力」を実感しました。「今後、被災した企業という位置から脱却し、ピンチをチャンスにして、あの時がターニングポイントだったと振り返ることができるよう頑張りたい」などの言葉が胸に響きました。

また、街づくりのNPO法人や地域活性化を目指す農業生産法人の訪問では、地域と深い関わりを持ちながら意欲的に新規事業を展開する方々の抱負をお聞きし、産業支援策とともに雇用助成金が役立っているとお話もいただきました。私たちが業務で接する企業の中にはこのように力強く復興に奮闘している事業所も多いですが、他方風評被害等から売り上げが伸びず、破産申請等に至る企業もあります。特に原子力災害の影響は大きく、避難12市町村においては原子力災害の影響で避難生活が長期化している事業主や離職を余儀なくされた方々が多く、避難指示が解除された又はこれから解除される地域や避難先で事業再開を果たす事業主を中心に、他地域と比較すると復興の加速化がより顕著な課題となっています。

申請いただいた全ての事業主を支援したいところですが、要件の規定などで対象外とせざるを得ない事案もあり、事業目的と実務の間で苦慮することもあります。



<出典>ふくしま復興ステーション(復興情報ポータルサイト)



2 復旧・復興状況や被災地での見聞・感想

和田：<派遣2年目の感想等>観光に加え復興状況を知る機会を友人とともに

普段生活している福島市では直接の被災の跡を見ることは少ないですが、自宅周辺をはじめとして除染作業は常時行われており、報道も熱心で目にしない日はありません。出張や休日で県内各地を訪問する際も、地震、津波、原発及びそれに伴う風評被害の影響を感じる事が多々あります。それと同時に、担当している助成金を受給している事業所を目にする機会も非常に多いです。

業務外の時間においても、福島県職員や他の派遣職員の方々と県内各地を訪問するなどして親睦を深めつつ、福島県の魅力や現状を体験、理解するほか、イベントに参加することなどによる職場外の方々との交流、デスクワーク中心の日々を省みて健康管理と気分転換を兼ね復興支援や風評払拭を目的とした県内のマラソン大会に出場するなどして過ごしています。こうした様々なアプローチ



相馬郡飯館村内某所に置かれたフレコンパック
(除染作業で生じた廃棄物)



南相馬市原町区萱浜地区でゴールデンウィークに行われた菜の花迷路

により福島県民の方々と触れ合うきっかけを作りながら、業務外でも復興にも関わり、時には充実した時間も確保できています。知人が来県した際には、訪れることによって理解していただける現実もあることから、観光地に加えて被害状況や復興状況が見える場所にも案内することで福島県の今を知ってもらう機会を作りつつ、自らの見識を高めることにも努めています。

岩手県や宮城県に行くこともありますが、復興のあゆみを強める様子を見ると福島県の置かれている現状はやはり過酷であるとの認識を強く持つとともに、関東では風化が進んでいる点も気になります。被災された方の声を直接聞く機会も多く、明るい話ばかりではありませんが、それを乗り越えて1日でも早い復旧・復興が実現するよう福島県職員や他の派遣職員の方々とともに引き続き支援業務に取り組んでまいります。

沓澤：＜派遣半年の感想等＞息の長いボランティアパワーの結集



熱気溢れる飯坂温泉けんか祭り（福島市）

歴史や山歩きが好きなので、会津若松や尾瀬、吾妻連峰などにはたびたび訪れていましたが、赴任後この約半年間では、これまで見られなかった多くの祭りや自然などを福島県内各地で体験することができました。

その中で最も印象に残った、社会貢献活動と音楽を融合させた世界的プロジェクト「ロックコープス」について報告します。

このイベントは2003年にアメリカで始まりフランス、イギリス、イスラエル、メキシコなど世界9か国において行われていて、昨年アジアで始めて日本でも開催されることになり福島県を中心に活動等が行われました。各地域で開催される4時間のボランティアに参加すると、活動の最後に行われるライブイベントのチケットが手に入るというものです。

また出演アーティストがボランティアに参加するのもこのイベントの特徴で、これまでレディー・ガガなどの有名アーティスト達が社会貢献活動に参加する姿が世界の注目を集めてきたそうです。2回連続して福島での開催となった今年は中島美嘉や海外からのビックアーティストとしてウィル・アイ・アムなど4組が出演し福島市内のあづま総合体育館で9月5日に「打ち上げコンサート」が行われました。

ボランティアの実施期間は、5月からコンサート当日までの約4か月で、19のNPO法人等が開催する様々な活動があり約3500人の参加があったそうです。福島県内では、海岸清掃、農業支援、仮設住宅の手伝い、観光マップづくりなど、また宮城県では南三陸町のワカメを飼料に育つ羊牧場の手伝い、東京都内では写真の修復作業などの活動が続けられました。

私は7月上旬、相馬市のNPO主催の観光マップづくりのバスツアーに参加しました。4～5人ごとのチームで市街のお店を取材し、新しい観光デジタルマップのデータを整理する作業で、炎天下のまちあるきとなりましたが、被災や復興に関するいろんな話が聞くことができました。

活動最終日のコンサート当日、会場には県内名産品の屋台や、活動フォトパネル・メッセージボードなどが並び、ユニホームTシャツの参加者達が再会を楽しんだり、メッセージを書き込んだりしていました。このあと約4時間にわたり、ボランティアで汗を流した仲間約3300人が、熱いパフォーマンスで一つになるときを味わいました。

「コミュニティを作ったり災害を受けた場所を復興させる手伝いをエンターテインメントの力を使ってできることがとても素晴らしい」と出演者の一人が語っていましたが、まさにボランティアを広げ、長く続ける新しい形のひとつだと感じました。



コンサート会場前の屋台、メッセージボード、活動パネル

参考閲覧先 <http://rockcorps.yahoo.co.jp/2015/> ボランティア活動の様子など